

令和4年度文化芸術による子供育成推進事業－巡回公演事業－

ワークショップ実施計画書【コロナ対策版】

制作団体名	公益財団法人江戸糸あやつり人形結城座
公演団体名	江戸糸あやつり人形結城座

内容
<p>●ワークショップ体験形態</p> <p>江戸時代、庶民から愛された江戸糸あやつり人形の歴史、江戸の知恵と文化が詰まった人形の機構を解説し、その後実際に子供たちに人形をあやつる体験をしていただきます。人形遣いが子供数人に対し一人ずつついて、丁寧に操作板「手板(ていた)」の持ち方や糸を使った操作の方法を間近で教えます。子供の数と人形の数によって全員同時に人形を持つことは出来ない場合がありますが、順番に、なるべく全員が体験したり友達が操っている様子を見たりして、理解と興味を一層深められるようにはたらきかけます。手板を持つ前に、子供たちにはアルコールで手指の消毒をしてもらいます。</p> <p>また、共演に向けて、WS参加者全員で旅人の台詞を言う稽古も行い、全員で参加する意識を高めます。</p> <p>派遣者は事前にPCR検査を受けてから現地入りします。</p>

タイムスケジュール（標準）
準備 約30分 所要時間 90～100分 撤去 約30分

派遣者数 ※派遣者数の内訳を御入力ください
6名（主指導者1名、補助指導者5名）

学校における事前指導
社会科の授業内で江戸時代の庶民文化や暮らしについて、国語の授業内で「東海道中膝栗毛」について事前学習していただくことを推奨します。事前学習の後に児童・生徒達自身が身をもって体験することで、現代まで継承されている江戸糸あやつり人形や江戸文化への理解・関心が深まることが期待できます。当団体から資料をお送りすることも可能です。

令和4年度文化芸術による子供育成推進事業—巡回公演事業—

本公演実施計画書【コロナ対策版】

制作団体名	公益財団法人江戸系あやつり人形結城座
公演団体名	江戸系あやつり人形結城座

演目
●人形と演目の解説 ●『寿獅子』 ●『伊達娘恋緋鹿子(だてむすめこいのひがのこ) 火の見櫓(やぐら)の場』 ●『東海道中膝栗毛～赤坂並木から卵塔場まで～』

派遣者数 ※派遣者数の内訳を御入力ください
15名(出演者7名、スタッフ8名)

タイムスケジュール(標準)
到着 7:15 仕込/リハーサル 7:30~12:00/12:00~13:00の内30分程度 本公演 13:30~14:50 内休憩15分 本公演時間の目安は、午後1時~1時30分から概ね2時限分程度です。 撤去 15:10~17:00 退出 17:30 ※午前中の公演を希望される場合、前日に仕込の時間をいただきます。

実施校への協力依頼人員
搬入経路が長い、2階、3階など高低差があるなどの場合、搬入・搬出時にご協力いただけましたら、スムーズに仕込み及び撤去の作業を進行できます。様々な事情により時間の遅れが出る恐れがありますので、何卒ご協力お願い申し上げます。

演目解説

●『寿獅子』

結城座に最も古くから伝わる演目の一つ。

厄を払い、福を呼び込むといわれ、お正月や祭りで舞われる獅子舞。

のどかな獅子、蝶を追う獅子、蝶に逃げられて怒り狂う獅子など様々な舞をお楽しみいただけます。

●『伊達娘恋緋鹿子(だてむすめこいのひがのこ) 火の見櫓(やぐら)の場』

江戸時代の実話をもとに作られた名作芝居。「八百屋お七」。人形浄瑠璃としても有名で、歌舞伎では「人形振り(人形浄瑠璃の人形の動きを真似して感情を表現する)」で演出されます。

八百屋の娘お七の恋人吉三郎は、紛失した名刀「天国(あまくに)の剣(つるぎ)」のために切腹することに。お七は吉三郎の命を救うため、自分が見つけた天国の剣を手渡そうと、火刑になることを覚悟で法を犯し、火事を知らせる火の見櫓の太鼓を打ち鳴らして閉まっていた町々の木戸を開かせます。雪の夜の美しくも哀しい名場面、美しい女形とその一途な恋心に心打たれる作品です。

結城座では九代目結城孫三郎以降、代々の孫三郎の十八番の当たり狂言として継承され、人気を得ています。今回は義太夫を故竹本素京の語りで、太夫と三味線弾きが人形で登場します。

●『東海道中膝栗毛～赤坂並木から卵塔場まで～』

江戸時代大ベストセラーとなった十返舎一九の滑稽本。本のヒットに伴い新内節や歌舞伎でも取り上げあげられ、人形芝居にもなりました。現在でも「弥次さん喜多さん」として人気が高く、映画やドラマでも親しまれています。

江戸をヒョンなことから食いつめた弥次郎兵衛と喜多八は、上方に向かって呑気な旅を続けている。赤坂並木(東海道五十三次の36番目の宿場「赤坂宿」/現在の愛知県豊川市赤坂町)を通りかかると、酒徳利を下げた子供が通る。2人はこれの一つ目小僧と間違えて、こらしめようと打ち叩いていると、その親爺が現れ「わが子に何をしやがる」と弥次郎兵衛の首をしめ、弥次郎兵衛は気絶をしてしまう。親爺は身ぐるみをはぎ、そばにあった経帷子(死者に着せる装束)を着せて立去る。息を吹き返した弥次郎兵衛は自分が死んだと思い、嘆き悲しむのであった。

結城座では江戸時代と同じく、軽妙洒脱な生の新内弾き語りのにのせて、江戸糸あやつり人形の繊細な技、人形ならではの仕掛け、江戸前の丁々発止な台詞のかけあい等を体感できる、結城座を代表する古典演目の一つ。今でも親しみやすい江戸の市井の様子、江戸庶民の生活風俗が描かれており、江戸文化を象徴する名作です。

2020年に約20年ぶりに復活公演を果たし、歌川広重の「東海道五十三次」を素に舞台にデジタル映像も投影し、臨場感を高めた演出を加え、若者にも「古典がこんなにおもしろい」と評判。中学・高校の社会の教科書に江戸の庶民の文化として登場するこのタイトルを、子どもたちが身をもって体験できる貴重な機会となると考えます。

児童生徒の公演への参加方法、公演に参加させるための工夫

事前のワークショップ参加者の中から2~6人程度（舞台の大きさ、コロナ対策の状況に応じます）の児童・生徒に、本公演の作品の一つ「東海道中膝栗毛」の冒頭で、東海道中を行き交う旅人として公演に参加してもらいます。人形のあやつりに加えて、台詞を言うことを合わせた表現を体験し、公演にて発表していただきます。糸あやつり人形を使いながら、台詞を言い、演じながら公演に参加すること、また参加している友達の姿を観るという行為は、感性豊かな小中学生にかけがえの無い表現の場として提供され、そして本物の伝統芸能を身近に感じる体験となり、日本文化への興味と関心を持つことが期待されます。

事前ワークショップを希望しない団体については、児童・生徒は公演に参加せず、人形と演目の解説の時間を長く取ることによって、江戸糸あやつり人形への理解・関心を深めてもらえるよう工夫します。

児童生徒とのふれあい

コロナ禍のため、積極的な触れ合いは難しい状況ではありますが、学校様のご要望にはできる限りお応えしたいと考えております。